



TITLE:

統計拾穂抄(九)

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. 統計拾穂抄(九). 經濟論叢 1929, 29(6): 926-937

ISSUE DATE:

1929-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129821>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 六 第

卷九十二第

行發日一月二十年四和昭

論 叢

地租に於ける累進

運賃負擔力の表現としての容積と重量

平均生産力説について

說 苑

貨幣價值決定原理の一考察

所謂公開市場取引に就いて

明治政府の貸附金

講 演

國民的産業としての生糸

雜 錄

地方税不動産取得税

舊博士 斗南士族の就産

統計拾穗抄

株價指數に就いて

近著外國經濟雜誌主要論題

附 錄

本誌第二十九卷總目錄

法學博士	神戶 正雄
經濟學博士	小島昌太郎
文學博士	高田 保馬
經濟學士	柴田 敬
經濟學士	島 本 融
經濟學士	吉川 秀造
法學士	勝山 勝司
經濟學士	安田 元七
經濟學士	堀江 保藏
法學博士	財部 靜治
經濟學士	益田 熊雄

二、生類の現計に關する Fairchild の學說、イ、自然は潤澤、慈仁又親切ならざること、ロ、自然は個體の殘存よりも種の連綿を重んずるに似たること、ハ、社會の諸問題上考ふべき有真理の要度、ニ、殺生の二大形式、ホ、不動數の法則、ヘ、動物間に於ける同一原理應用、ト、不齊一の世界に於ける一種生物の存域は一部に限らるゝこと、チ、死てふ通行秘、リ、高等有機物に於ける一體化、ヌ、人間に於ける有自然法の支配脱却、ハ、生命の代置、ヲ、將來の見込、三、結言。

一

生々之謂易とするは、滅々之謂易と文字を換へても、通用すべく想はるとは、會て一文を草せる序に挿入せる文句なり、(本誌第十三卷三七頁參照) 然るに近年に至り、和漢の學に通じ又高邁の見に富みし、水戸藩の學者會澤安(文久三、即ち西曆一八六三年八十二歳にて歿す)が、同様なる觀想に立脚し、人口増減の理論に關して立說せる所、興味多きを發見せるを以て、以下かかる理論の一端を取扱はんとするに當り、先づその所説

統計拾穗抄(九)

財部靜治

一二 天益人か生者必滅か、

日次 一、天益人生者必滅相反に關する會澤安の所説、

を紹介せんか、即ち同氏晩年の著書「閑聖漫錄」(青山延光撰元治元、即ち一八六四年の序を掲ぐ)は、凡て十八題目の小品により、その學殖識見の程を窺はしむる中に、「天益人生者必滅相反」と題して説ける一文あり、曰く

神州は古より生民を天益人と稱し、天然にて生者必滅と云と相反することは天地の自然に出たる也、東方は陽氣の發動するが如く生氣あり、和樂して勇猛なり、西方は陰氣の凝結する所なれば、其人皆陰氣を受けて人情風俗冷氣の沈鬱する如く、活意なく深刻にして陰晦なり。故に其道とする所も、東方は天地の生物を本として生民の倫理を明にす、西方は寂滅を主として死後の禍福を説く、東西の陰陽晦明は天地の自然にして氷炭の相反するが如し。天地の初に伊契册尊陽神にましまして日々に千頭カウヘを殺んとありしを、伊契諾尊陽神にましまして日々に我は千五百頭を生すべしとのたまへり、實にかくの如く日々に生者あり死者あれども、生者は死者より多く、人民繁ふすること天地の道なれば、生民を天益人と稱せしも又宜ならずや、死は生の終なれば人も禽獸も生るものは必死す、草木も又然り、故に佛は生者必滅を説き、死生榮枯する中に生氣を合て頃刻も盡る事なきを知らず、

一年に四時ありて春は生じ冬は枯る、各盡きざれば春に回ることあたはず、されど生氣は常に盡ずして、春の發生は冬枯の中に籠り、冬至に一陽來復す、草木の枯るも未だ枯ざるに枝上に實を結び、地に落て再び發生する萌芽は枝上の實なれば、天地間に生氣充滿し、永久連續して盡ることなし、是を生者必滅と云べけんや、故に聖人の書にも生々と云こと、尙書易等に見え、中庸にも天地之道可一言而盡也、其爲物不化、則其生物不測と云、生を言て滅を言はず、神代の益人の義と符節を合せたるが如し、然るに西方は陰氣の國にして陰道なれば、寂滅を主として生者必滅を説き、人は未だ死ざる前よりして生氣を後に傳へ、永世盡ることなきは天地の自然なることを知らず、屑々として一身の苦樂を思ふの切なるよりして生老病死を憂念す

と、かくてかゝる基本觀念に本づく佛教の厭世的人生觀につきての、略説を以て之を受けつつ、それは「人をして生を樂まずして是を厭はしむ、人の身に苦樂はあれども、實は苦より樂の多きを知ら」ざるものなりと評論し、同時に又樂觀的人生觀の一端を説き「衆人の中には貧苦艱難はあれども、千萬人を通觀すれば康寧無事なるは多し」、又「終歲憂戚に沈むは少し、憂戚

あるも日朝暮憂戚のみにあらず、「三百六十日を通観すれば、平和にして事なき時刻は艱苦の時より多し」「小人は戚々として常に憂る故無事の時も憂愁あるが如くなれども、無事にして生て世に在るは樂みなり。」とし、更に尙基本假説の撮要を繰返し「萬物の生々するは自然の天道なれば、天益人の生を喜び死を惡むは自然の人情にして、是即ち天道なり、然るに其身は生きて世に在ながら世外の身になり、眼前に生者の人倫あるを知らずして、遠く死後の快樂を願ふ、自然至實の天道を棄て、意想の臆説に従ふは惑の甚きなり」と論じたり。今是を宗教的目的論的見地より評論し、特にその構想が和漢哲理思想史上の產物として、如何なる地位を占むるかを検討するが如きは、素より本編の意圖する所にあらず、されば狭く之を人口論の見地より考察するに、その思索上凶年、疫病並に内亂戦争の影響により、人口増殖が如何なる制限を蒙るべきかにつき、相當に配慮せるや疑はしきものあり、又萬民一律の理法を考ふるに急に於て、當時に於ける四

民の別により、區別して考ふる點に粗なりしの嫌あり、一般にその所説の幾部分が、その當時の社會事情に關する觀察經驗を土臺として、立てられたるや疑なき能はずと雖も、生者必滅の理を採り入れて、その思索を組立てられしは確かに一卓見なり。

吾人は以下右會澤氏の卓説に端緒を得て、叙説に一步を進めんと欲する者なるが、茲に先づ卻いて一考すべきは、生々又は生者必滅の理が、全生類を通じ一律に適用さるべしとしても、その支配を受くべき形式及程度につきては、一般動植物と人とを區別して、考ふるの餘地に富まずやとすべきこと是なり。此點につき近日一讀の餘參考すべきもの多きを覺ゆるは、紐育大學教授 Henry Pratt Fairchild の一著書 *The Foundations of Social Life*. 1927 中の叙説なり、本著者は十餘年前 Yale 大學助教授たりし當時「應用社會學概論」*Outline of Applied Sociology*, 1916 を著はし、就中人口増加に關する理論的研究に、相當の興味及造詣を有することを示せるのみならず、移民問題に關する數著

をも公けにせるを以て、右の叙説に相當の敬意を表し得べきを想ひ、以下その骨子を紹介せんと欲す。

二

イ、自然はその諸相中の一部によれば、潤澤、慈仁、又親切なるは眞なり、されど一面生命の糧として自然により授けらるるものと、他面自然が絶えず生み出す生命の嵩とに關しては、右三者中の何れともすべきこととなし、萬山又は草原の渺茫を想ひ、海洋の洪大に想到する際、自然は恰も潤澤なるが如し、されど卻きて默考せよ、その自然により造られたる諸生物が、如何に迅速莫大の率により、新生命を生み出すことを強ひらるるかを、唯一番ひの鰻によるも、二年を経ば全海水をこの蠢動せる動物の一大群に化せしむべく、又一番ひの牡蠣も五代を経ば、全地球の八倍を掩ふべきことを想はば、自然は親切及寛仁とすべきものとは、全くその選を異にすることを實感す、その食糧を以て之が饗應に招ける生物に比せんか、全く極微なり。

ロ、生命の二大目的詳言すれば、個體の殘存及種の連綿中、自然は後者を重んずること、無量に大なるに似たり、自然は何かの方便により、次代の繼承保證せらるるの一事備はる限り、一代の者に如何に大なる苦痛又は損失を及ぼすとも、之を少しも介意せざるに似たり、かくて自然は主として殺生によりその目的を達す、自然を愛し之が四時の眺に心を慰むる者も、自然の最も特色ある諸相の一が、一大屠殺場たるの一相に存すとの、驚くべき實感を何時かは起さん、この自然の過程たる主として殺生の繼續的亂舞なり、こは何人にも森林又は原野の何處にか一時間又は二時間丈け佇立し、鑑識眼を以て自己の四周に起る事件を見張らんとする者の、自から等しく實證し得べき所なるが如し。

ハ、人々が人間社會の諸事件を論ずるに當り、自然に歸るべきことを主張し、又社會的諸方案が諸自然法に反するを理山として之を非難すること、頻繁なる事實に照し、以上説ける諸眞理に重んずべきものあるを

見る、されば自然の諸方法及諸過程何たるかを、明かに諒解するは格外に有益なり、かくて始めて吾人はかかる方法及過程に歸るべきや、將た然らざるやを解し得べし。

ニ、自然界に極めて恒同たり、又その著特徴とすべき發生は、二大形式を採る、その一は能動的、直接的、積極的、侵襲的にして、追撃、攻撃、押領、捕獲をその特色とす、この形式は一の鷗鵲に忍び寄るべき狐、一のヤナギバエ Minnow を追撃すべき小梭魚、草の種粒を食ふべき雀により例證せらる、その二は間接的、受動的、又間々無意識的なるも、恐ろしく執拗なり、こは地の有限供給に處し執念深く敵視する結果なり、そは「老林檎樹の蔭にて」年々惹起さるる無數の苗の枯死により、又數十億の若き牡蠣が、海底に適當の棲息所を發見し得ざるにより、又嚴寒なる一季節のため新英蘭の冬鳥に課せらるべき重通行税により例證せらる、生存競争に敗れて最も無力とせらるべき個體は、その敵の攻撃により擒となるべき最初のものた

り、是等は疑もなく「何れの動物も自然の死により死せず」とする、名言の後ろに存在する事實なり。

ホ、今や直ちに採用され得べきその以上の一總説として謂ひ得べし、他れの時を選ぶも地上に於ける生命の量は、常にその時に現存せる諸生命形態の有の儘に訴へて有り得べき丈けなり、あらゆる種の組成員數が制限せらるるは、その種の再生力に由來せずして、常に地の給養力によるが故に、その結論の歸する所、地は常にその地により支へ得る丈けの生命に充てりとすべし。

是等諸事情に本づく顯著なる結果の一つは、「不動數の法則」Law of Stationary Population と呼ばれ得べきものにて謂ひ表はさる、此法則は約言せんか、自然に於ける名々の種は一の種として別れ發生せる後、比較的短き歲月内に、地により支へられ得べき丈けの最多數に達し、その曉以後は事實上その數に不動を續くべし、何かの宇宙變化起り、その種の蕃息に順又は逆の影響を及ぼさざる限りは然りとするにあり、こ

の法則の意味を最も會得し易からしむるため、地が土壤、氣候等に關し、凡て齊一の性質を帶び、又この地上には單獨の一植物形態あるのみと假想することとせん、その際その植物が一年内に二つの種子を生ずると、二百萬の種子を生ずるとを問はず、地により授けらるる一切の負載域及一切の養分は、極めて短き期間内に役立ちらるべく、その以後は代々相重ぬるもの植物の個數に、何等の増加を示し得ざるべし、その事態は右の如く一種の植物存する代りに、數種の植物ありとしても、實質的に變ることなかるべし、唯その場合には各種の個數を決定すべき諸因子は、土地の諸性質のみならず、之を他の種植物の諸特質に求むべし、換言せんか生存競争は加はるべし、唯何れの二植物も完全無缺の競争者たらざるを以て、地上植物界の總量は、その種繁多なる場合には唯一の種ある際に比し處らくは一層大なるべし、諸種の種間に一の釣合又は比は生み出さるべく、各種は結局その最多數に達し、かくて又その後は不動を續くべし。

へ、同じ諸原理は一種の動物又は諸種の動物起りても元來有效なるべし、現存せる各種はその程度に多少の別こそあれ、他の各種の生存事情に於ける一因子たり、競争のみならず協力及相互助援は、複雑なる一生命型の間に窺はれ、次代に對する先代の親愛は、諸種の形式により示さる、かくて「自然の平準」Balance of Natureはその間に興るべく、そは生物學者間に多大の實證を喚起せる所なり、而して一の種に於ける諸變態が、如何なる程度迄他の種間にその影響を、及ぼし得べきかを豫言するは難し。

ト、その事態は齊一ならざる一世界、詳言すれば風土、溫度、濕度、高低、土壤構成等に萬花を呈すべき一世界に之を及ぼすも、原理に於て異なる所なし、前との主要相違は何れの種も、全地球を以て可能的棲息地とさへもなし兼ねべきことなり、ありの儘なる地球上何れの部分に到るも、よくその部分に順應し、その生存過程を全うし得べき種は一つも存せず、之を割合に大なる生命型間に搜すも確かに然り、寧ろその代りに

各種は、己が棲息所たるべく大なり小なり制限されし地積の、諸事情に順應せらる、各種が事實上占むる部分地積は、即ちその眞の存域なり、従ひて各種が一不動數に達すべき點は、全體としての地そのものの負載域及食餌により定まらずして、その郷土の負載域及食餌により定まる、しかもそれは素より同一郷土に棲める他の現存有機體より、受くべき生存競争により制限せらる。

銘心さるべき肝要の事實は、自然の法則が不動數の法則たることなり。

チ、自然に於ける死てふ通行税 Toll of Death in Nature が甚だ苛重なりとすべきは、右不動數の法則が普遍にして又不易なるに由るものなり。かく一種生物の總量にして増加すべきに非ずとせんか、そは生れ來ると恰も同じ丈けのものは、死するの外なきことを意味す、換言せんか一新代の中より成熟期迄成長し得べきは、その先代の死により彼等のために開かれし餘地を、塞ぐ丈けに止まる、自然に於ける死亡率及出生率

は常に等し、而してこの死てふ通行税は、第一に新生の者に課せらる、牡蠣が生み出す千六百萬又は六千萬の卵中、成熟期迄成長し得べきは二つに過ぎず、その他の多數卵中息の門出を踏み得るものさへ僅少なり、又汝の隣地に偶々一の白楊樹榮ゆるものと想へ、毎年二日又は三日の間、空を通して揚るべきムク毛様なる微物の雲起り、遂にその周圍數百碼に亘る地面は、薄き降雪により掩はるるの狀を、呈することを汝は熟知せん、されど之を十年前に比し今日白楊樹幾本か増せる、十中八九一本もなかるべし、是等小羽毛をつけたる種子の一つ一つは、一出生を代表し、一樹木に成長し得ざる一つ一つは、一死亡を代表す、而してこの種の例證は無限に倍加され得べし、下級生物間に於ける幼者死亡率が、その總出生を倒し盡す迄に及ぼされんとして之に届かざる程度は、何時も一死の一極微分數丈けなり。

り、されど有機物の標準を登すに従ひ一變化は伺はる、一兩親よりする出生數は減じ始め、孫裔間に於け

る殘存の割合は増し始む、この改良は少くとも部分的には、何れかの形式により孫裔のためにする兩親の世話又は保護起るにより惹起さる、一切の植物と下級動物型とを含むべき下級生命形態にありては、兩親と子との唯一關係は、直接又殘忍なる敵視の關係なり、若者は即時にそれ自體の計を環らすべく擲げ出され、自活するために遺棄せらる、一個體の負け味は歴伏的に大なり、されば自然は蕃殖力をその以上に大ならしむるも、就中一つ二つの特別個體につき廻り合せ順なるべきことを、裁斷するものは偶然なり、されど一旦智能が如何に原始的又微力なりとはいへ、右偶然の戯れを改めんとして起るや、種存続のために必要な出生數は低下され得べく、又之に相符して引下げらる。

又、人のあらゆる事功中最も驚嘆すべきは、自然界に於て甚だ免かれ難き、不動數の法則を從來免かれ得たる事實なり、人はその存在の全紀を通じ、その數を増すことに着々成功せるのみならず、引續ける加速的比により之を増さしめたり、此方向に於ける最も著しき

事功は、最近の一世紀又は二世紀中に起れり、この特殊事例につき第十九世紀は隨一として擧ぐ、最良の推算によるに一八〇〇年には、世界全體を通じ約七億人ありき、その後百年にして概説十七億人に及べり、是等の數は思想にとりて無類の糧を授く、かく人は一百年間にその數を二倍の遙か以上に、達するの能ありとすべきのみならず事實達せる點迄、是迄に達したりとして、將來の望は何たるべき、別言せんか人類は總計七億人を存生せしむるため約五十萬年を費やせるに、次の百年間には之に添へて十億人を殖やしたり。

是等は多分社會統計の全範疇に於て、最も重要な計數なり、動物の一新種たる人は、その發端とせる祖宗少數なりしに係らず、五十萬年餘にして自然の最も不易なる法則の一につき、如何にして克くその支配を免かれ得たる。

從たる細目全部を不問に附し、眞骨髓を抜いて答ふることとせんに、そは判然たる二相を呈するを見る、即ち人は二つの基本的工夫、詳言すれば移動及經濟開

化の發展及應用により、不動數の法則を脱却したり、而して是等二者は緊密なる交互影響及纏綿の關係により織込まる。

ル、何れの時を選ぶもその時に現存せる諸生命形態の有の儘に訴へて支へ得る丈けの生命により、世界は常に充つること、又出来充たされしこと、されど一新型の生命よりせんか、常に利用され得べき未占據の安全郷あり、その虚に乗ずるに適應せる限り之を利用し得べし、即ちその新型の生命は現在空虚なる一安全郷を充實することにより、或は諸型の舊來生物により占據せらるゝ諸安郷に就き、多少完全に是等を押し出すことにより安息するを得べし、人は一新型の生命として、是等二方法を兩つ乍ら採りて蔓延したり、一小程度迄は他の動物により充たされざる一安全郷を、新に利用する方法によれるも、大部分は他の動物を否植物迄もその安全郷外に、従ひて又生存の外に押し出したり、こは考へ及ぼされしこと餘りに尠き、人間進歩の一相なり、人が不動數法則の支配を脱却し得たるこ

と、地の生命支持力増進上、人成功せるに由るとすべきよりは、人生により他の諸生命形態を乗取れるにすること如何に多きか、吾人の追懷より洩るる所なり、人は無双の諸性質により、他の各生命形態を實際上統制するの一統領位に自叙するを得たり、人は此優位に處して他の生命形態全部に蒞み、已れのために有用なるや有害なるや、或は可不可なしとすべきやにより之を評價し、之に相應して行動す、人の經濟的進歩は人に無益又は有害なりし、動植物を驅除し、有用形態をして之に代らしむるの過程を踏めること著大なり、人始めて現出せるに當り、現存せる生命の分量如何に洪大なりしかを想はば、此方便のみにより人口増加をして、莫大の數に上らしめ、又極めて長き年月に亘りてその勢を續けしむるの、途を開きしことを實感するは難きに非ず、されどこは避け難き限界を有すべき一過程なり、人のために無用又は有害なる動植物が何れも根絶せられ、何かの用に供せらるべきものをして之に代らしむる時、別言すれば生命を支持すべき地の材料

が微塵の末迄も、生存のため人の願望すべき各生物保全のために用ゐる盡さるる際、右方便の限界は到来せん、歐洲諸舊國の一部に空中旅行を遂げ、今尙殘存せる荒地が如何に狹隘たり、土壤の各噎は何れかその最良用途とされ得べきものに、如何に周約的に向けらるるかを察する者は、右の極限が如何に近く近寄られしかを切に感ぜん、米國に於てさへ既に古き殖民地方にては、人の願望せざる有機體により、占據せらるる空間如何に狹小なるかを察知するは易し、莫大なる水牛群、鳩の群に關する記憶を辿り、急に失せ行ける國內森林を望觀し、又一の野禽その他の野生物を、保全するため迫られたる不斷闘争の記憶を促さんか、極めて新しく文明の拓殖を見たるこの地域に於て、人が他の諸生命形態の代りに、人の生命を代置し、土地の萬有生命支持性を、人間支持性專用に轉ぜしむるの目的上、如何に成功せるかを雄辯に立証す。

右結果の多くは自然の諸形態及物質の諸關係につき、別に遠き將來を想ひ又は深く探りて長計せるによ

り達せられしに非ず、單に現存せる物資を一層完全に利用することにより達成されたり、されど微妙又工面上手なる人の腦力は、右の進歩基本のみに甘んじつつ久しく止まるを許さざりき、寧ろ勢に驅られて自然の深玄なる秘訣をも穿ち、本源の諸力そのものに手を觸るることとなれり、こは科學の領域なり。

又、積極的に限られたる物資供給を備ふる地上に於て、無限に増殖すべき人類の能力及傾向につき、發展する諸社會は可能的に何をなし得べく、又有利に何をなし得べきかの一問題が、元來人口問題なり、人は從來移動及經濟開化の方便に訴ふることにより、不動數法則の支配を免かれ得たり、されど右の兩者中前者は明かにその積極的制限を有す、かくて人口の分布更新及再調整の方法により、將來尙可能とすべきもの多しとするも、此仕方にて將來何れかの目星き富源開發され得べき可能なし、移動の方便は事實上終局に達したり、將來の人口増加は殆んど全部之を經濟技術の前進に待ちて、之を解決するの外なし。

人口過飽和の末期に達する迄の永き以前に、何事起り得べきかを指摘するは、社會科學者の仕事にして、何事を須らく起らしむべきかを決し、又之を惹起すべき諸方便を工夫するは、社會技師の仕事なり、是迄に知覺されたる一事によれば、可能の最大増加が起り得べきよりも永き以前に、一人當り有形物の平均供給、即ち生活標準と呼ばれるものが、大低下を惹起すは避け難きことなり、之を世界全般として考ふるに、是迄經濟技術の進歩により、生活標準を支ふるに足れるのみならず、大に之を改良し得たり、されど是等の進歩は移動、詳言すれば引續き新しき土地を取得せることと相待ちて成就されたり、將來の人口問題は産業技術に於ける改良が、「新土なくして」人口に先んずるの勢を續け、又生活標準を支へ得る丈け、急なり得べきやの問題なり、兩事は最早並進し得ざるに似たり、さればこの事態に備ふるの準備として、社會的有望の標準を採用し、是等利益の孰れを、助長せんと望むべきかを洞察し得んことは明かに肝要なり。

社會に關する學問の態度とすべきは、全人口問題が出来る丈け完全に、知識、道理、先見、熟慮及選擇の範圍に、移管さるべしとするにあり、今日にありてはそは主として信念により支配せらる、素より此問題に付信念の元素を、一切除くは多分可能ならざるべく、否望ましきことたらざらん、されどそは餘りに重大なる事柄なるを以て、科學的方法の完全利益は拒まるべきに非ず。

三

以上 Faichild の所説として説き來れる所につき稽ふるに、元來博物が古來一律に不動數の法則により、羈束せらるると一斷して可なるや疑なき能はず、吾人は動物學就中經濟、動植物學、並に東洋本草學にエコマク、ボムレーンドグリーフ通すること甚だ淺きを以て、博物の順應並に之に伴ふ變態、自然分布地域の擴大、並に血脉相承孫裔愛護作用等により、その數の増殖に寸功をも及ぼし得ずと得心すべきや疑なき能はず、現今尙國勢調査の方法を离

獸魚介草木の末に及ぼし、その各現計を情査するの見
込なき限り、生類につき不動數の法則恢々疎にして漏
らさずと大悟するは、天の網を觀じて外道の殘忍なる
縲紲視するの嫌なしとするを得ん哉、吾人は之が斷言
を後日の研究に待たんと欲する者なり。而も亦將來に
於ける口數増殖の可能は、人に關する限度に於て右著
者によりても許さるる所なり、此點につき輓近科學を
全然無視し、一信念のみにより動くは非なりとすべか
らんも、世には所謂科學の淺智を一信念化するがため
に、世俗を誤るの例もなしとせざるに似たり、吾人は
今一切之が詳論に觸れず、會澤正志齋の所説を附載す
るに止めんと欲す、即ち氏説いて曰く、「月は日の光
を受け光を生ず、月の光は即ち日の光にして別に光あ
るにあらず、夜は晝に配して一日の中に包まる、朝日
の夜は朔日にして其晩は二日なれば日を數へて夜を數
へず、動植の物死し枯るるも其生の終にして又死すれ
ば生氣を子に傳ふ生道の外に死道といふことあるべき
理なし、人は生道を盡して足れり」と。